

東京外語大教授

中嶋 嶺雄

課題が経済、エネルギー問題に偏り過ぎて、本来サミットにふさわしい文明論をたたくかわせることが少ないようだ。日本はとくに官僚が優秀で、あまりにもおせん立てをし過ぎるので、とくにこの点が懸念される。

たとえば、中国の問題がどう取り上げられるのか。中国は弱かれた社会への移行を開始した。だが、近代化は簡単なことではない。中国市場の将来性について、日本はそううまくはいかないという教訓を得たが、米国、西欧はまだわかっていないようだ。

世界最大の人口を持つ中国がどうなるかは、今世紀に残された文明的課題だ。日本はアジアの国として、サミットをこの論議の場にするよう努力すべきで、カーター大統領

領も、中国のこまかいことはおそろく何も知らないだろう。各国首脳が利益代表となるのでなく、アジア、中国の文明論を語ってほしい。

また、オーストラリアをせびとも

アジア、中国の文明論も



招待しなかった。日本にとって日豪関係は、経済的に日米関係に次いで重要だし、過去十年間の経済成長は、オーストラリアあってのものだ。

アジアで初のサミットであり、大平首相のアジア・太平洋

洋圏構想とも関連するオーストラリアの参加は、資源、エネルギー問題の観点から、サミット全体にも意義があっただろう。私も、外務省との会合の席で提案したのだが、西欧側の反対が強そうだが、という理由から実現しなかった。日本外交にとって千載一遇のチャンスを選じた気がする。

もう一つ、中ソへの影響を指摘したい。これまでサミットはヨーロッパ中心の会議というイメージだったが、今度アジアの目の前で、会議をする。これに対し、東側はいまスタスタだ。彼らも社会主義諸国のサミットを開きたい誘惑にかられるのではないか。最近、中ソ交渉の動き、チトー・ユーゴ大統領の訪ソなど、脈流が動き始めている。

(談)